

とすることが出来る。フオノライトは野外に於いてそれと認められたものを見ず、研究室に於いて灰黑色緻密の岩石であることを知つたのみである。又たテフライトは其の特に暗黒色なることを除いては玄武岩と區別し得ないから野外で之を知ることが出来なかつた。流紋岩、松香岩は特有の外見をなしてモンドールからプエ

ド・サンシー(Puy de Sancy)(一八八六米)に登る時に之を認める事が出来る。
以上の如き火山岩より成る此の有名な火山地方も我が讀者の誰もが容易に近づき得る所とも思はれない。依つて多少とも之を知らんと欲する讀者に益する所でもあるかと思ひ敢て秃筆を振つて少しばかり述べて見た。次に此の地方の旅行記を掲げて見る。

伊太利ところ



(三二)

瀧川規一

「ラファエルのフロレンス市滞在」マイケルエンゼロが羅馬に去り、レオナルドがミラン市に去つた後師友として仰ぐべきは只ドミニカン派の修道僧にして畫家なるフラ・バルトロムメオ(Fra Bartolomeo)丈けとなつた。この兩人は互に影響をうけた。やがてマイケルエンゼロに彫刻を依頼した廉で名を後世に垂れてゐる

富裕にして教養のある商人タデオ・タデー(Taddeo Taddei)が青年畫家ラファエルを愛しラファエルは屢其家に訪れ客となつた。ラファエル自らもこの人に負ふ處甚大であると語つてゐる。この人の爲めに畫家は二つの繪を描いた。その一つはマドンナ・デル・プラト(Madonna del Prato)と題すもので今日ザインで見ること

とが出来る。一五〇六年の暮に描いたものにマドンナ・デル・カルデリノ (Madonna del Cardellino) と題するものがある。これはフ市で見る事が出来る。元來ラファエルが友人の結婚の贈物として筆をとつたものである。聖母と基督と聖ヨハネが居り、聖母は片手に本を開いて居り聖ヨハネはよく繪にある葦の十字架を基督に與へないで金翅雀を與へてゐる風變りの繪である。一五四八年の地震の時に大破したが其後修繕成りウフィッチに珍藏されて居る。ルーヴルにあるラ・ベル・ジャルデニエール (La Belle Jardinière) も亦この期に屬するマドンナである。小兒のヨハネが細い十字架をもち跪いてゐる。基督は母の顔を見上げ何か物事を問はんとしてゐる有様である。何れのマドンナを見ても共通な優しさと麗はしさとがある。是等の繪の人物の配置はレオナルドの「岩の聖女」及び「聖アン」の繪から暗示を得たと云はれてゐる。畫中の草花に至つては寫眞的であり殊にカルデリノのマドンナの繪にある背景に至つては伊國人

であるならば直にアルノ (Arno) 河畔の低地な事が判る。一方には山間の溪谷にかかつてアーチ附の支柱のある橋が遠くに見え片方にはフロレンスのジオモ (Duomo) と平野とがまた遠くに見える美しき風景である。

この繪の下繪は今日英佛兩國で見られる。また今ウフィッチでは基督と聖ヨハネの繪の下圖が見られる。ピチにはマドンナ・デル・バルダッキノ (Madonna del Baldacchino) と題する未完成の繪がある。聖母の玉座の兩側に居る聖徒は畫僧バルトロムメオの描いたものに似て居る。この頃のラファエルは畫僧の手法に倣つて下繪に黒ずみを用ひてゐる。當時ラファエルの畫友にして構圖をラファエルに依頼するものが多く生來優しい人のよい畫伯はその依頼に應じて助力を吝まなかつたので今日一見ラファエルらしく思へるが而も筆力の弱いものが澤山に残つてゐる。

フ市に滞在すること二年にして暫時故郷ウルビーノに歸つたがラファエルは再びフ市に來た。

この時ラファエルは自らの力に不安を抱き構圖の工夫に専念した。従つて種々の研究を試みた。その下繪の多くが歐洲各國の美術館に散在してゐる。畫伯の考が如何なる經路を辿つて進んで行つたかを知るにはこの下繪を見るに限る。邦畫の見地から見下繪には一種盡きぬ興味があるものである。死せる基督が母に抱かれ多くの使徒に圍繞されて居る圖の下繪が牛津及巴里にある。これを記憶して居つてフ市のサンタ・キアラ (Santa Chiara) の修道院にあるペルデノの描いたピエタ (Pietà) と題する基督の死の繪を見るとラファエルがこの頃何を描かんと欲してゐたかが判る。悲哭する婦人の顔を研究した下繪また聖ヨハネの足許に跪いて事切れた基督の屍體に悲の眼をもつて見はつて居る下繪が英國その他で見られる。こゝまで進んだ彼はどうしたとか考を一變して基督が岩にかけられた墓穴に階段をのぼつて運ばれモーダリンのマリアが基督の片腕を支へて居る下繪を作つてゐるこの中心人物の群の下繪はウフィツチで見られ

地上に跪いて氣絶せんとする聖母を支へてゐる多くのメリの一人の下繪は大英博物館にある。こゝまで考が進んだ時にラファエルの考は三變した。聖ヨハネを只一人立たせ兩手を拱き絶望の苦悶をあらはして聖體を擔げる人々の間にあきモーダリンのマリアは死せるキリストの上に身を屈めて居るやうになし、右手に氣絶せんとする聖母をおき他に一人の婦人がキリストの屍體を支へてゐる間に周圍を見廻はしてゐる様子を作つて左右の連結を作つた。斯くして出來上つたのが「埋葬」と題する有名な繪であつて羅馬で見ることが出来る。この繪に對しては後世の評家が非難する。これ等の別々のモチヅを結合したのが爲めに全體の調和がとれてゐない。初期に見た自發的魅力がなく自然の優美に缺いてゐると云ふのである。線と形の精確があり人物の姿勢表情に變化があり人物を多く集合せしめ得た巧妙さはこれを認め得ても畢竟するにアカデミックな繪であるとなし難いのである。この繪の出來上つたのを見たフ市の人々は後世の

評家のやうには考へなかつた。

フ市の人々は極力これを讚美した。最上の勤勉と愛と藝術と徳とが合成して出来上つた完全なる作品であると推賞した。ペルヂア市の人々はこの繪を市の最大寶物なりと考へてゐたが、フランシスカン派の僧侶がこの繪を羅馬のカーヂナルに贈り夜中秘かに運び去られたことを知つて怒つたのである。

ラファエルが一五〇七年にペルヂアで祭壇用の繪に従事してゐる間に故郷のウルビーノで訴訟を起され裁判所に召喚された。ウルビーノで百クラウンの家を買つたが代金支拂の請求を債權者の爲めに市の公爵の出納係に支拂へと云ふのであつた。これを機會にラファエルは公爵一家との連絡がつきその緣故で推薦されたか或は他の理由であつたか判明せぬが法王ジュリアス二世から羅馬に行くべく召喚された。

ラファエルはこの時までに既にフ市に於て學び得る凡てを學んだ。ラファエルの畫風ウムブリアの畫風タスカニの畫風は皆これを習ひ得て

自己藥籠中のものとなし得た。畫家として必要なる科學的知識と技巧の完成と人間の運動を表はし人の情緒を示す生きた表現法とに於て他に遜色なきまでに進んだ。然るに猶彼は更に大にして廣く高き知識と卓越とを求めてやまなかつた。研究心が極度に永續するはよいが、受感性の大なる人は斯うした場合に自己個性を發揮する機會を失ふことがある。今やラファエルはこの藝術家として貴重なる個性を失はんとする危険の時期に達してゐた。この時に當つて天運幸して羅馬への召狀が法王から來た。彼の大先輩がなし得た後を追ふことが出来た。新生面を展開すべき機會が到來した。彼は欣然として法王の召に應じた。今後羅馬に於けるラファエルの活動については遺憾ながらフロレンス市とは關係がないのでこれを省かなければならぬ。

「フロレンス市の畫僧フラ・バルトロムメオ」畫僧と云へば邦人は雪舟を想起す。フロレンスに在つて畫僧と云へばフラ・バルトロムメオ (Fra Bartolommeo) を想起す。彼以前にフ

市に畫聖として名筆を後世に傳へてゐる僧が二人ある。一人はフラ・エンゼリロ (Fra Angelico) であり他はフラ・フィリッポ・リッピ (Fra Filippo Lippi) である。この兩畫僧は伊太利文藝復興の初期に屬する人々であつてラファエルの時代よりは舊く直接の關係がない。今はラファエルに直接に關係のあるフラ・バルトロメオのそのことを述べる。フラ・バルトロメオの本名はバッチオ・デラ・ポルタ (Baccio della Porta) と云ふ。父は驢馬を追ふ馬子であつたが市の城門外に僅かながら土地と家とを所有してゐた。畫僧は一四七五年にその長男に生れ九歳の時に父の知人なる彫刻家ベネデット・ダ・マジヤノ (Benedetto da Majano) の勸告に従つて畫家コシモ・ロゼリ (Cosimo Rosselli) の畫房に入ることになつた。バッチオは畫伯の爲めに繪具を擦つたり畫房を掃除したり金錢のお遣ひに行くことを仕事とし實直に働いた。性質溫順であつたので多くの友人から愛されてゐた。うちにも親密なる友達が一人あつた。その友情の濃

密なるによつて、當時の史家ヴァサリ (Vasari) はこの兩人は同心一體なりとさへ云つた。この友人の名はマリオット・アルベチネリ (Mariotto Albertinelli) と云つた。

斯く同心一體なりとさへ云はれた友人でもその趣味に於て各異つてゐた。バッチオはフ市にあるカルミネ (Carmine) の陰暗なるブランカッチ (Branacci) 祠堂に入つて當時の畫界の巨擘マサチオ (Masaccio) の描いた壁畫を研究すると云ふやうな性質でありマリオットはメデチ (Medici) 家の庭園にある古典の彫刻物を研究すると云ふやうな趣味をもつてゐた。當時サヴォナローラ (Savonarola) はドミニカン派 (Dominican Order) の修道僧として一四九四年にフ市に來り熱辯を奮つて説教し聽衆を魅了した。この熱辯の怪僧はフ市の再生を説きフ市にやがては襲ひ來るべき神の怒を豫言しフ市を救出すべき者は佛蘭西のチャールス三世なりと考へた。斯くて反對派のフランシスカン派 (Franciscan Order) の僧等と衝突し遂には法王と衝突

し破門されて一四九八年にはその二人の弟子と共に絞刑に處せられた。兎に角一時はサヴォナローの熱辯によつてフ市の人々は心肝を寒くした。青年畫家バッチオはまたこの怪僧の説教を聴くべくツオモ (Duomo) に集つた一人であつた。彼は怪僧の説教を聴いて流涕を禁じ得なかつた。當時サヴォナローに反對したフランシスカン派はドミニカン派を罵つてピアニョニ (Pignoni) 即ち泣虫黨と云つた。フランシスカン派はアラビアッチ (Arrabiatti) 即ち狂暴派と云ふ惡名を頂戴した。フ市はこれ等兩派の修道僧及びその黨徒によつて互に鎬を削つた。バッチオの友人マリオットはこのフランシスカン派に屬してゐた。

兩人が斯くの如く趣味と信仰を異にしてゐて而かも友情の濃密は決して薄らがなかつた。バッチオの父及び義母が逝いて後に若き兄弟等を遣した時バッチオは彼等を養ふためにマリオットと共に書房を開き獨力で製作の依囑を受けた。

斯くフ市に於て宗教熱の再燃した時期に於てバッチオが製作した畫のうち今日フ市で見られるものは第一にウフィッチ (Uffizi) 美術館にある二枚續きの板に描かれた「基督生誕と割禮」(Natività e Circoncisione) がある。元の所有者ピエロ・デル・ベリニエーゼ (Piero del Pugliese) が珍藏してゐたと云はる程あつて出来榮がよくて畫に充分に表はされた宗教心に觀者は感銘を深くする。次にアカデミア (Accademia) にある怪僧サヴォナローの肖像である。この肖像はプラト (Prato) に住む誰かの私人の所有物を模寫したものである。繪には「神より送られたフェララの哲學者豫言者の肖像」(Hieronymi Ferrariensis missi a Deo, prophetae effigies) と書かれてゐるがサヴォナローが迫害を受けた頃には塗り消してあつたと云ふ。模寫によつて窺ひ得るサヴォナローは黒頭巾に頭を包み怪僧然たる氣魄の力強さを眉宇の間に示しその太い鷲鼻は相手を壓する力がある。この力強き顔から説教をきいて若き畫家が涕泣したのも無理か

らぬことである。一四九七年の謝肉祭にはバッチオは町の四辻に積み上げられた火刑用の薪の上に今迄習作した裸體畫を多く置いて燃え去る火焰を凝つと視た。自ら私淑する信念の指導者が怒れる群衆の爲めに僧院に襲撃され遂には獄に投げ入れられ死刑に處せられんとした晩は他の人々と共にこれを防ぎ衛らんとした。若き畫家には恐ろしき浮世を目前に見せつけられ絶望と悲愁の日が續き精神的打撃をうけた。然しこれによつてサヴォナローをもつて神より派遣された豫言者でありフロレンス市の救主であるとする信念を益強めたのである。怪僧の面容の力強さは斯うした精神で描かれたらしい。

憂さ世の相を目撃しながら彼は藝術に専念し求に應じてサンタ・マリア・ヌオヴァの病院に附屬せる墓地の建物の壁に「最後の裁判」を描きはじめた。繪は今日殆ど見る影もなく荒れてゐるが、ウフィッチ美術館に收藏されて居る。凡ての使徒等を従へて片腕を高く差し上げ復讐心の強き裁判の主なる神が雲上に姿を現はしてゐる。

構圖の偉大さは今日充分窺はれる。迫害のうちにも獅子奮迅の勢をもつて永久の眞理を求めてやまなかつた神靈の師の志を畫によつて繼いだとも云ひ得る。然しこの仕事はバッチオ一人の力では完成しさうにもなかつたので壁畫の上半分丈け描いて後は友人のマリオットに完成を委かした。出来上つたのは一五〇〇年である。バッチオは師の後を追ふ積りであつたか或は現世の悲痛に耐え兼ねた爲めであつたか意を決してプラトのドミニカン派の僧院に初心者として入つた。この期に屬するバッチオの作品はミランにある「基督を拜むマドンナ」があり巴里ルーヴルにある「ノリ・メ・タンゼン」(Noli me Tangere)即ち「吾に觸るる勿れ」と題するものがある。

僧院に入つてより四年間は彼は全く畫筆を棄てて省みなかつた。然るに賢明で博學であるとの評判の高いサンチ・バニ(Santi Pagnini)と云ふサン・マルコ(San Marco)の僧院長の懇請があつて拒み難く再び畫筆を執ることになつた。

これよりバッチオはフラ・バルトロムメオの名を以て畫僧として世に知らるるに至つた。サゾオナロラは嘗て説教のうちに「若し修道僧にして天職とすべき説教の方に乏しく神學研究の慧智なきものならばよろしく繪畫建築を研究すべし」と説いたことを想起し、爾後自己の藝術を以て神の爲めに捧げ社會の福祉に貢獻せんと決心した。従つて彼の描かんと欲するものは直接間接に宗教に關するものであつた。斯くて僧院に入つて以來はじめて出來た繪はフ市のアカデミアに掛つてある「聖バーナードの幻想」である。この繪は或る僧院の祠堂に用ふる爲めであつたがどれ丈けの潤筆料を支拂ふべきかについて僧院長及び注文主との間に意見が纏らず仲裁者が幾人も呼ばれ遂に決定したので筆者が貰つた額は百フロリンであつた。と云ふ曰く附きの繪である。

新著紹介

新著紹介

○地理學叢話

山崎直方著

四六版二六二頁

古今書院

發行

昭和七年六月

定價一圓八〇錢

山崎先生の短篇を第三年忌に際して門下の方々が編輯されたものが美しいこの叢話である。學密にあられた頃の「大磯驛近傍にある横穴塚穴の話」から薈去された昭和四年の「獨逸と聯合國の科學上の融和」に至るまでの十七篇が集められてゐる。先生のオリヂナルな業績は藝に山崎直方論文集前後二篇として上梓されたがこの叢話の方は如何にも先生の機智や鋭鋒を窺はせるものがあつて地理學の面白さを容易に覺えさす點が著しい。先生の透徹した精緻な筆致や語風は如何にも地理學説述の模範である。秋夜故人を偲びながら靜かに本書を繙かば地理學の翠線に觸れるべきを期してよい。たゞ裝幀の南國の島の地圖や隼人石の圖版などに編纂者の説明がない爲めに讀者の感興を殺ぐ恐れがないでもないのを編纂各位に御注意申上げる。(N)

○寶石の話

西岡葉祐著

四六版二三四頁

古今書院發行

昭和七年七月 定價一圓八〇錢

寶石を礦物學的に説明したもので寶石を中心とした人事の葛藤などを書いた「話」ではない。第一編の研究方法は總論であつて人造寶石の章に書いてある所は寶石愛蔵者の是非知らねばならぬ事柄である。第二編の各論の方には總ての寶石類を記述してゐる。但し本邦産のものについては寶石にならぬものまで産地を舉げてはあるが、寶石として用ひられたり、